

八 忠實服業は最後の勝利

稼ぐに追付く貧乏なしとや、従つて稼がなければ、屹度貧乏に追付かれ、追越されて、浮ぶ瀬もないことになる。「ノ木片の家を出にけり貧乏神」貧乏神を追出すには、ノギ片の家即ち稼ぐに限る。

貧乏の神を入れじと戸を締めて、能く見れば我身なりけり

これでは困つた。

去處に一人の美人が居ました。其の姿の艶麗なることは、曼陀羅華、蓮の華の如くで、何とも云へぬ程の美しさである。従つて男と云ふ男で、此の女に想をかけぬ者はない。中でも選抜の者四人が、媚殿の候補者となりました。四人は互に意を凝らし、術を盡して、戀人の意に適ひ想を遂げんと焦つてゐる矢先無慘やな、その花は不圖した急病のため、夜半の嵐と散つて了つた。サア大變、四人の者の愁嘆は一方でない、天に泣き地に咽んでも飽足らぬ。呼んでも叫んでも、落花枝にかへらず。第一人はいつそ一思に冥途の道連にと、戀人を焼く火葬の火に、飛込んで共に灰となつた。第二人は焼けた戀人の灰を集め、側に庵を結び墓守となつて、日々冥福を祈る。第三人は失戀のあまり、世を果敢なむ修行者となつて、諸國行脚の旅に出た。あとに残つた第四人は、仕方なく斷念たものか、家に歸つて舊の如く家業に就きました。處が第三の修行者になつた男は、他國遊歴の途次、さる修驗者の家に至りて一食を乞へば、快く迎へられて、暖い爐邊に家人と共に食膳は供せられた。折しも修驗者の子は痛く泣き始め、どうしても止めない。始末に困じた父は、怒の餘りか、其の子をとつて、燃え立つ炎の中に投込んだものだから堪らない、見るく悲鳴の聲と共に焼け死んだ。行脚の修行者は、この殘忍見るに堪へず、顔を覆うて家を出でんとする時、主人は呼び止めて、奥の間

から一冊さつの書物しよもつを持つて来て、披ひらいて或呪文あるじゆもんを唱となふれば、不思議ふしぎや、今迄灰いままではいとなつてゐた子供こどもが蘇生よみがへつて、にこくして居る。と同時に修行者しゆぎやうしやの胸むねには、何なにか新しい想おもひが湧わいて來た。彼は其夜かれそのよ、闇やみを幸さいわひに忍しのび入いつて書物しよもつを偷ぬすみ出し、急いそいで戀人こひびとの墓場はかばに至り、例れいの呪文じゆもんを誦じゆするや否いなや、灰はいとなつた戀人こひびとは突然とつぜん其の美しい姿すがたを現あらはした。それと同時に、共に死しんだ第一人だいいち人も、厄介やつかいなことは蘇よみがへつたのである。彼等かれらは天てんに舞まひ地に踊をどる程ほどに喜よろこんだも暫しばし、やがては戀人こひびとの爭論さうろんが始はじまり、打うつ、蹴ける、何いづれか血ちを見みねば止やまぬ有様ありさま。折柄をりからき來合あはせたのが勇軍大王ゆうぐんだいおう。一仕始終ぶしじゆうを聞取きくとつて裁判さいばんし判決はんけつを與あたへた。曰いはくさ、生せいを與あたふるものは親おやであるから、蘇よみがへらした者は、即すなはち戀人こひびとの親おやでなくてはならぬ。生せいを同じくする者は兄弟きやうだいである、依よつて同時に蘇よみがへつた第一人だいいち人は、兄けい妹まいであらねばならぬ。又灰またはいを集あつめてそれに事つかへた者は奴隸どれいである、されば以上じやうの三人にんは皆夫みなをつとたるの資格しかくがない、第四人だいにんの、家いへに居あて業げふを勵はげんだ者ものこそ、正ただしく戀人こひびとの夫をつとであると。こゝに第四人だいにんは戀人こひびとと共に家いへに歸かへり、幾千載いくせんざいの契ちぎを結むすんだと云いふことである。

これ豈あに印度古代いんどこだいの物語ものがたりとのみせんや。何いつの時何ときの處ところを問とはず、成功せいこうと榮えい譽よとは、忠實ちゆうじつなる勵行者れいかうしやに歸きするものである。華くわを去さり實じつに就つけ。

貧乏びんぼうの棒ぼうが次第しだいに長ながくなり、廻まはしかねたる歳としの暮くれかな

辛抱しんぼうの棒ぼうが次第しだいに長ながくなり、貧乏神びんぼうがみを追出おひだしにけり